

ハロウィン短編集 2021 —サンプル—

目次

従順ペットの発情生活 「いたずら」	2
キス・イン・ザ・ダーク 「家族」	6
人体改造博物館 諏訪×千尋 「甘い体」	15
戸惑いの花嫁 「いたずらをして」	21
その後のお話 (おまけ)	37
あとがき	43

従順。ペットの発情生活 「いたずら」

「——はい、ではたしかに確認いたしました。ところで先生、そろそろハロウィンなので、お菓子をお送りしますね」

「ああ……」

パソコン机の左端に置かれたカレンダーを見る。あと三日で、今月が終わるらしい。「最近先生がプリンにはまってるって聞いたので、地方のめっちゃくちやおいしいうって話題のお送りするって社長が」

「お気遣いなく」

来月中にまとめておきたいプロットがある。今のうちに書いておかないと季節に合った発行ができなくなりそうだ。

「いやいや、先生はなんといってもうちの売り上げナンバーワン作家先生ですから！では新刊のご準備もお願いしますね！」

最初から最後まで元気な声に苦笑しながら、別れの挨拶を述べて通話を終える。うるさかったか、と振り返ると、皐月は赤いクッションの上で体を丸めて眠っていた。

(……最近かまってやれていないな……)

餌もじゅうぶん与えているし、性欲の処理だってしてやっている。世話はじゅうぶんしているけれど、遊んでやれていないことを申し訳なく思う。

(またしばらく休みを取るか……)

幸い、原稿さえ書き上げられればあとは自由だ。当分寄稿は受けないことにすれば、時間を作ることができるだろう。とりあえず来月半ばくらいまでは仕事を詰めて——ひとまず寂しい思いをさせているお詫びに、ハロウィンを楽しもう、と考えた。

「皐月、皐月」

「わふう……」

午前中庭ではしゃぎすぎたのか、皐月は十四時過ぎから眠っていた。寝息や寝言まで「わふう」「わふう」「わう」なのがかわいらしい。こういう姿を見ると、本当に皐月は人間ではなく犬として生きる喜びを得ているのだと実感することができる。

(よだれ垂れてる……)

プリンの夢でも見ているのだろうか。邪魔をしたくはないが、遊びたい。口元を指で拭い、もう一度呼びかける。

「皐月」ふと思い立ち、次は小声で。「……おやつ時間だよ」

「わふう……わふう！」

ぴたりと閉じていた瞼が、「おやつ」に反応した。くりつと大きな目を見開き、キラキラと輝かせている。

(……本当に寝てたよな?)

「わふっ？ わんっ！ わふっ、わふうっ」

皐月はもう四つん這いで、早くリビングに行こうと体を折坂にこすり付けている。すりすり……ぐりぐり……ぐっぐっ……あまり焦らずと転ばされるので、立ち上がってドアに向かう。

「おいで」

「わっふうん！」

リビングの床に、小皿を置く。載っているのはかなり濃厚なオレンジに近い黄色のプリン。

「わふううううううっ！」

またよだれが垂れそう。視線はプリンにくぎ付け状態。しかし手のひらを皐月に向け、「待て」と短く告げる。

「わふっ！」

その顔はまるで「僕は優秀な犬！」と言わんばかりだ。その顔を歪ませ……もつとかわいい顔をさせたくなる。

「待て……待てだよ」

皐月も折坂の目をじっと見上げていた。

「僕はちゃんと待てるからね！」と言いたげな顔。

まだじっと見つめたまま、口を閉ざしておく。すると次第に皐月の目が泳ぎ始めた。「僕、上手に待てできてるよね？」と不安になり始めているのがわかる。

それでもまだ、じっと見つめる。そうすると今度は皐月の眉根にしわが寄り始めた。食べたい欲と闘っているのか……さすがにまだ、折坂への怒りではないだろう。

「……皐月」

ぴくつと体が跳ねた。目が大きくなり、期待が膨らんでいるのがわかる。

「まだ待てだよ」

「わふ……」

眉尻が下がり始めた。もう折坂を見てはいない。落ち込んでいるよう……これはおそらくプリンを見ている。次第に頭の位置が低くなり――。

スンスン。

「待て……待てだ」

皐月がハッとした様子で姿勢を直した。しかしまたすぐ、体が前傾姿勢を取る。

キス・イン・ザ・ダーク 「家族」

「北川くん、今日きた患者さんにはこれ渡してくれる？」

「はい」

院長に向けて左手を差し出すと、上に手のひらサイズのも物が置かれた。プラスチックだ。右手でぺたぺたと触り、感触を確かめる。

「上に回すタイプの蓋がついてる。中身は飴だよ」

「飴？」

「そう。次の週末はハロウィンだから、一週間これを配ってみようかと思って」

「ああ、そういえばそうでしたね」

試しに蓋を開けてみる。中に手を入れると、個包装された飴のギザギザが指先にわずかな痛みをもたらした。

「仕事帰り、一日一個もらっていいよ」

「え？ いいんですか」

「いいよ。イチゴ、オレンジ、グレープ、メロン、桃があるから。好きな選びたかったら言ってみよう」

「ありがとうございます」

最近急に寒くなったとは思っていたけれど、先週末までは半袖で過ごせるくらいに暑かった。だからハロウィンなんて、まだ先というイメージだった。

(カレンダーが見えるっていいなあ……)

生まれつきの全盲なので、そういうものがあるということしか知らないけれど、日付を見ることができたら、もつと日々のことを意識しながら過ごすことができるだろう。今日は何曜日で、明日の予定は恋人とデートで、なんて。そしてその次の週になったら、わくわくしながら書いたデートのメモが、心を温かくする思い出に変わっている。

(隆司さんもカレンダー使ってるのかな)

そういえば、それが家にあるかどうかも知らなかった。床やテーブルに置いてあるもの、キッチンや浴室用品は気になるけれど、壁にくっついてあるものなんて考えたことがなかった。時計だってポスターやカレンダーだって壁に貼ると聞いたことがあるけれど、輝の生活には一切影響しないものだ。

(帰ったら訊いてみよう)

着替えを終えて、患者さんをベッドに通す。最近若い人が増えたなと感じるのは、みんな忙しさを抱えているせいなのだろうか。

「ねえ隆司さん」

「ん？」

「うちにもカレンダーってありますか？」

「カレンダー？」

今日の夕食はカレー。シミになると落ちないから気を付けてねと教えてくれた母の声を思い出す。あの言葉はたぶん、いつか輝が独立したときに困らないようにと言ってくれていたものだ。両親は全盲であることを気にしながら、それでも普通の人と遜色ない生活を送れるようにといろんなことを教え、経験させてくれていた。

「はい。カレンダーに、予定とかって書いてますか？」

「いや、書いてないよ。予定が気になるか？」

「あ、いえ。カレンダーの存在って意識したことなかったなと思って」

スプーンで一口。咀嚼するとコリツとしたものがあつた。福神漬けだ。スプーンを入れればどこがカレーでどこがご飯なのかの判断はつくけれど、さすがに福神漬けまでは食べている間に動いてしまい、わからなくなる。

「ああ……あ、あるらしいぞ」

「え？」

「点字でできたカレンダー」

どうやら調べてくれたらしい。やっぱり目が見えると、便利だ。

「買おうか」

「あ、いえ。いりません」

「そうか？」

カチという音が前方から聞こえた。スプーンで食べ物をすくう音。話に集中せず、食べながら話す。会話が当たり前のものではなく、普通の日常になっていることに幸せを感じる。

「はい。あの、卑屈になつてるわけじゃないんですけど、どうせ書けないですから」

「ああ……そうか。だがその月が何日まであるかとか、曜日とか気にならないか」

「ラジオや朝のニュースで日付や曜日は言ってもらえますから。それに何月まであるかっていうのはほら、手をグーにすればわかるじゃないですか」

「グー？」

今度はカタ、という音だ。おそらくスプーンを置いたのだろう。輝も皿に置いて、左手で拳を作る。それを胸の高さまで上げて、三崎に見せる。

「人差し指の付け根から小指の骨に向かって数えていくんです。人差し指があるところは骨がでばつていでしょう。だから一月は三十一日。二月はイレギュラーだから飛ばして、その次は三月……これもでばつてるから三十一。次は凹んでいるから三十日……」

「本当だ。知らなかったよ」

小指までいったら、人差し指に戻ってくる。そうすると、三十一日が二か月続く七月と八月も数えることができるのだ。

「ふふ、使つていいですよ」

なんて、もう大人なのだから何月が何日までかなんて頭に入っているだろう。でも三

崎が知らないことを輝が知っている、というのは珍しかったし、教えるようなことなんてないので楽しかった。

「ああ、使わせてもらおう。これ便利だな」

三崎が一、二……と数えている声を聞きながらカレーを食べる。でも今度はご飯ばかりだった。混ぜちゃいたいな、と思いつながら、「それはお行儀が悪いのよ」と言った母の声を思い出す。「でも家族の中だけなら、おいしく食べられるのが一番だからお母さんも混ぜちゃおうっと」そう言って、輝の気持ちに寄り添ってくれた優しい母。

「——輝？」

「え？」

「どうした？」

「あ、いえ……何でもないです」

三崎とは家族になったのだろうか。三崎は輝がカレーとご飯を混ぜたら不快な表情を浮かべるのだろうか。輝の見えないところで。

人体改造博物館 諏訪×千尋 「甘い体」

「ちーくん、おはよ」

「うー、おはようございます……」

顔を振ると、諏訪の大きな手が目の辺りに被せられた。もう一度顔を横に振り、手にこすり付けて眠気を覚ます。

「かわいい。おててがないのに上手におめめをこするね」

「ん……もつと」

もう目は覚めてきた。けれどももつと「かわいい」と言われたくて。目を閉じて手が置かれるのを待ち、頭を振る。

「ふふ、かわいい。ほら、お顔拭こうね」

柔らかいタオルが顔を拭いながら温めていく。途中で横を向くようにして首をさらすと、そちらまでちゃんとタオルは動いてくれた。

「気持ちいい？」

「うん……きもち……」

でも次第にそのタオルは温かさを失い、拭かれた場所がスツと冷たくなっていく。しかしなんだか今日は朝から体が熱を持っているように感じていた。風邪とかではなく、興奮、という意味で——。

「あれ、少しえつちな気分になってる？」

「え……」

わかるのだろうか。でもペニスと亀頭しかないから勃起もしないし、オムツだって外されていないからカウパーのおもらしだってバレていないはずなのに。

「かわいいね……昨日お休みだったから欲求不満になっちゃったかな？」

「や、そんな……」

仕事がなかった分、ねっとり時間をかけて愛してもらった。乳首も亀頭も腫れてしまいうんじやないかと思うくらい舐め回され、普段ならできない射精もたくさんした。でも愛されている時間が長いと尿をお漏らししてしまうこともあって……そんなときは「飲みみたい」と言われたけれど、「それだけは嫌」と言って、でもそのせいで尿が漏れ出る様子をじつと観察されてしまった。あまりの羞恥に頭の中がぐちゃぐちゃになって、いつも以上に乱れてしまった——と思う。

「やっぱちーくんはたくさんの人に亀頭をいじってもらって、ひりひりして泣いちゃうくらいにならないと満足できないえつちな体なんだね」

「やあ……違うっ」

「そう？ でも昨日は五回も亀頭をびくびくさせたよ。白いのも黄色いのもたくさんお

漏らしたのにさ」

亀頭びくびく——つまり絶頂のことだ。いくという言葉の何倍もいやらしくて、それだけで会陰がぐちゅぐちゅになっっていく。

「うう……匠さん……」

もう亀頭をいじってほしい。口でなくてもいいから、ローションをつけた手のひらで円を描くように撫でてほしい。

「あ、そろそろ支度しないと間に合わなくなっちゃうね。オムツを替えてご飯にしよう」
なんだか今日はいじわるだ。怒っていない様子に見えたけれど、本当は、まるで諏訪の愛撫だけでは足りないと言っているような体が許せなかったのだろうか。

(むしろたくさんいじってもらってそれを引きずってるだけなんだけども……)

しかしそれを言っても今更だろう。言い訳だと思われてしまうおそれもある。それなら態度で示すしかないな、と思いながら身を任せた。

「じゃあ、またあとでね」

「はい……」

博物館に着き、いつもの場所で準備をしてもらう。それが終わったら寂しいけれど、仕事の時間。上から仕切り板が下りてきて、丸見えの下半身が壁のあちら側に消えていく。

(ああ……)

今からまた、見ず知らずの男性に敏感な亀頭をいじくりまわされるのだ。しかも、恋人である諏訪に説明されながら。

「あつ……」

突然亀頭に何か——客の手だ——が触れた。乾いた指は撫でることなく、ツンツンとまるで弾力を確かめるように刺激してくる。

(もうっ!?)

早い。もうお客さんがきたなんて。

「あ、あつ……」

気持ちいい。でも足りない。もつとちゃんと触ってほしい——相手は諏訪ではないとわかっているのに。きつと今頃諏訪は「ペニスの竿を切除し、亀頭だけを残しました」「亀頭を中心にある穴は今は飾りで、排泄や精液は会陰に開けられた穴から垂れ流します」「手術の影響で排尿の感覚はないため、いつでもオムツをつけて過ごしております」なんてことを言いながら、大切なところに触れさせているのだ。「どうぞお触りになってください」「もしよろしければローションとガーゼのご用意もございますので」「えっ？絶頂ですか？もちろんです。ご満足いただけるまでどうぞ刺激なさってください」。

(ああ……ダメっ……)

戸惑いの花嫁 「いたずらをして」

「おはようございます」

「おはようございます……」

今日もオスメイド長の大樹とメスメイド長の香澄は笑顔で寝室に入ってきた。

「よくお休みになりましたか」

「はい……」

大樹が幹人のオムツ——昨夜も蒲生に愛されたので、アナルがゆるんでいるからとつけられた——を外し、いつもどおりの準備を進めていく。

「旦那様、本日の奥様のペニスと陰囊のカバーはこちらです」

恥ずかしい。でも気になって視線だけで覗き見ると、今日のそれはオレンジ色をしていた。いつもの白よりはマシ………と思いたいけれど、それはそれで目立って注目を集めてしまいそうだ。

「ああ、今日はハロウィンか」

「はい。奥様のお召し物もハロウィン仕様にされたらお楽しみいただけるかと思いましたが……」

忘れていた。そういえばハロウィンだ。ということはこのオレンジはかぼちゃだろうか。

「奥様が勃起なさるとジャック・オ・ランタンの顔が見えるようになっております」

「それはいい。——ミキ、たくさん勃起してかわいい顔を見せてくれ」

する……と頬から首にかけてを撫でられると、昨夜の蒲生を思い出した。いく間際の、眉根にできたしわ。苦しそうで、でも気持ちよさそうで、そんな表情さえも絵になるほどかっこよくて……そんな人に抱かれているのだと思ったら興奮してペニスカバーをたくさん濡らしてしまい、まだ射精もしていなかったというのに大樹にカバーを替えられた。

「……いやらしい顔になってる。せつかくだからみんなに見せて歩いてごらん。だが他の人にいたずらはされてほしくないから、これがミキからのお菓子だと言うんだよ」

「そんな……」

ぞくぞくする。ここに来てすぐのころは戸惑いばかりだったのに、今はその戸惑いさえも快感にしかない。

「ミキは私の自慢の妻なんだ。ペニスにかわいい飾りをつけているのだから自慢したい。とてもよく似合っているだろうと」

「恥ずかしいです……」

話している最中だというのに、大樹は「失礼します」と言って幹人のペニスと陰囊にカバーをかけた。根元がゴムになっているのできつくはないし、勃起をしても締め付け

られてしまうこともない。

「大樹、準備は終えたか？」

「はい。朝食の準備も整っております」

「じゃあミキ、ご飯に行こう」

焼きたてのロールパン、カリカリのベーコン。目玉焼きはとろとろの半熟で、すりたてのゴマで作られたドレッシングのかかった色鮮やかなサラダにはさくさくのクルトンがのっている。

(おいし！)

ここに来て、幹人は何もしていない。簡単に言ってしまうえば大金持ちの伴侶なので家事さえもする必要がない、という状況だ。ただの穀潰しだよなと思うものの、蒲生は片時も離れたくないからプロポーズしたんだよと言ってくれるし、オスメイドもメスメイドも、会えば気軽に話してくれるようになっていた。

食べ過ぎて膨らんだお腹を前屈みになって隠しながらミーティングルームに入り、決められた席につく。全員が着衣なのに幹人だけが裸でペニスと陰囊にだけカバーをまとっている——幹人に合わせられた室温は穏やかに素肌を包むのに、その異様さが肌寒さと、体の内側から発する熱を感じさせる。

「おはようございます。本日のミーティングを始めます」

すべての椅子が埋まったのを確認して、秘書の金田が口火を切った。「本日はハロウィンですので、奥様のペニスカバーと陰囊カバーも特別仕様となっております。ひと工夫されているようで……これはそのときのお楽しみとのことですが、それが奥様から従業員へのお菓子になります」

ひと工夫——勃起をするとジャック・オ・ランタンの顔が見える、ただそれだけなのに大樹と香澄を除く全員がワクワクしたような表情で幹人を見た。咄嗟に俯き、顔を隠す。

「それから、本日十八時よりハロウィンパーティーを行いますので各自準備を進めてください」

パーティー。そんなことまでするのか。まるでテレビや映画に出てくる貴族のお屋敷のようだ。どんなパーティーなのだろうと隣に視線を向けると、愛する夫が目を細めた。「夜のお楽しみだよ。今夜は少し寝るのが遅くなるかもしれないからお昼寝をしておいで」

「え、でも……」
その間だって蒲生は仕事だろう。ただの穀潰しでしかない幹人が蒲生の仕事に寝るなんて。

「昨夜もたくさん射精したし疲れているだろう？ それに昨日は昼間もかわいらしく腰を振ってオナニーしていたからね」

「やっ……!!」

恥ずかしい。ここにはたくさん従業員がいるし情報だつてすぐに共有されてしまうけれど、蒲生の執務室に入ってくるのはほとんどが限られたメンバーだけ。だからオナニーの様子なんて言われなければ知られなくて済むかもしれないのに。

「そうだ、一度オナニーをして射精すればすんなり眠れるんじゃないかな——今日のミキの肉オナホと肉デイルドは誰だったかな」

「私達です」

手をあげたのは和沙と康生。オナニーという言葉を使っているけれど、実際にしているのはセックスと変わらない。それをこうして堂々とみんなの前で——。

「わかった。では十時頃執務室に来てくれ」

「かしこまりました」

二人が頷いたのを確認し、蒲生が幹人に向き直った。

「そういうわけで今日のミキのオナニーは十時からだよ。大樹、ミキのアナルはまだとろけていたかな」

「はい。今朝の確認の段階では昨夜のセックス前と同じ状態に保たれておりました」

「ミキのアナルは優秀だね。私のペニスも肉デイルドも上手に受け入れることができる」
もう消えてしまいたかった。どうしてこう毎朝みんなの前で恥ずかしいことを言われなくてはならないのだろう……それでも逃げずにここに来てしまうのは蒲生が幹人を愛し、本心からみんなに自慢したいと思ってくれているとわかっているから。

「こちらからの申し送りは以上ですが、何か意見のある者は——」

金田がみんなの顔を見回したけれど、誰も手を挙げなかったので今日のミーティングは散会となった。執務室に向かいながら蒲生の腕を引く。

「ねえ、誠司さん」

「どうした？」

「いつも恥ずかしいことばかりですけど、僕が来る前はどんなミーティングをしてたんですか」

「そうだな……ほとんどなかったような気もするな」

「え、そうなんですか？」

朝のミーティングは日課になっているものだと思っていた。それくらいみんな当たり前のように出席している。

「仕事のスケジュールは金田が管理しているし、私が外出で食事が必要としないとか遠くに出張に行くとか修理で屋敷に業者を入れるとか、そういう特別な何かがあれば一応集まってはみても、その場で申し送りは特になしと言って終わっていたよ」

「それなら——」

幹人のことも何も言わなくてくれたらいいのに。セックスした際のペニスの状態とか、射精の回数とか——そうやって報告内容をひとつひとつ思い浮かべながら、「あ、でも排泄の回数や量については健康管理として必要なかな」なんて言葉が頭に浮かび、首を振る。

「ミキの健康管理は大切だよ」

「でも射精の回数とかは——」

「それも大事だよ。心身に異常があれば射精回数は減るだろうし、勃起の回数や時間だつて影響される。今のようミキが一日中勃起や射精をしていれば、元気なんだなと安心できる」

「でも恥ずかしいです……」

「勃起を恥ずかしがるミキもかわいいよ。そんなかわいい姿をみんなに見せて回りたい」健康状態なんて蒲生だけが知ってくれていけばじゅうぶんなのに——けれど自慢したいと思ってもらえるのは嬉しい。だからこそ、こうやって恥ずかしい格好のまま廊下を歩くのだから受け入れてしまえているのだ。

「大丈夫。すぐに慣れるよ」

蒲生が足を止めた。執務室に着いたのだ。開けられたドアをくぐり、素肌のままでも座り慣れてきたソファに腰を下ろす。

「仕事中は寂しい思いをさせるが、私はミキが近くにいてくれると思うだけで仕事を頑張れる。今日もいやらしい姿をたくさん見せてくれ」

目元を撫でられ、額にキス。このまま抱きしめてくれたらいいのに。けれど蒲生は今から仕事をしなければならぬ。

「……僕がここでえつちなことをするの嬉しいですか」

「嬉しいよ。ミキはたくさん精液を出すから部屋の中がいやらしい匂いで充滿して——」
「やっ……!」

精液の臭いのことなんてまったく考えていなかった。でもあれは確かに独特な匂いがある。というところはこれまでも途中でお茶を運んできてくれたキッチン担当の人とか、臨時の用があつて部屋を訪れてきた人にはいやらしいことをしたあとだとバレてしまつていたということなのか。

「どんな芳香剤よりも魅力的な匂いだよ。ああ……そんな話をしていたら嗅ぎたくなつてしまつたな。こちらに来てくれ」

腕を引かれ、立たされた。執務デスクに座るように促され、裸のままのお尻で神聖なそこに腰掛ける。

「……これはすごくかわいいな。本当はもっと早く見られるかと思つていたが」

「あつ……」

蒲生に見られてしまった——勃起しなければ見られることはなかったはずの、ジャック・オ・ランタンの顔。

「これから毎日、他のやつもこうして特別なときにだけ見られる工夫をしてもらおうか」

あとがきを含む約3万2千文字です。

各話の長さは目次からご確認ください。

(戸惑いの花嫁が長いです)

また、R指定のものについては本作に準じたプレイが入っておりますので地雷のある方はご注意ください。

(四肢欠損・飲尿・オナニー・オムツ等)

宜しく願いいたします！

ハロウィン短編集 2021 —サンプル—

gooneone (ゴーわんわん)

2021/10/26

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

ちのさのさの: gooneone

